

## 浜松文芸館 次回「浜松の幅広い文芸人たち」展示のご案内

ご好評をいただいております特別展示「浜名湖 湖北五山 ぶらり文学散歩」は2月26日で終了となります。期間中、多くの方々にご覧いただき本当にありがとうございました。また、好意的な感想も数多く寄せられ、職員一同励みとなっております。

さて、終了後、展示物の入れ替えに少し期間をいただきまして、3月10日(土)から、「浜松の幅広い文芸人たち ～浜松文芸の多彩なあしあとを辿る～」と題して、浜松文芸の先駆者と現代小説家のコラボ展を開催いたします。

浜松にはいろいろな文芸が脈々と息づいています。今回は俳句・短歌・作詞・演劇の各分野から下記のような先駆者と、現在活躍中の2人の小説家について、展示やトークを通してご紹介します。

縦・横に幅広い浜松の文芸をお楽しみください。

### <展示概要>

#### 先駆者4人の収蔵品

- ☆ 加藤雪腸(歌人俳人)・・・正岡子規選評 巻物 他
- ☆ 柳本城西(歌人)・・・回覧誌『犬蓼』 他
- ☆ 清水みのる(作詞家)・・・レコードジャケット 他
- ☆ 小百合葉子(劇団創設者)・・・写真、絵画 他

#### 現在活躍中の小説家貸料

- ☆ 渥美饒児(小説家)・・・作家ノート 他
- ☆ 七尾与史(小説家)・・・アイディアノート 他



先人の感性に触れ、今日の浜松文芸を語り、明日へと想いを馳せていただきたいと思います。

## 文芸館の四季

北の各地は例年以上の大雪とか。減多に雪とは縁のないこの地にも、立春を前にうっすらとではありますが地面を覆うほどの雪が降りました。

文芸館の樹木も葉にうっすらと雪をいただき、1・2分咲きのヤブツバキの紅が映えて見えました。

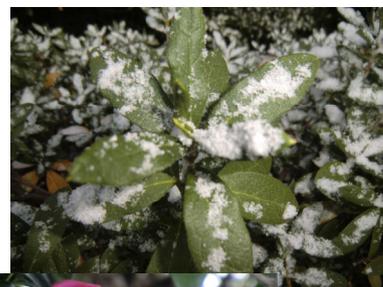
季節をまたぐ2月は短い月の割には時季の変動が激しいように思います。月末には、はや梅の盛りは過ぎ、桃の花が話題にのぼっていることでしょう。

ツバキの花言葉は「理想の愛」「謙虚」

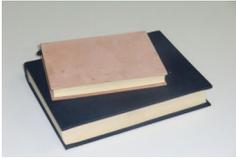
(赤)「控えめな愛」「気取らない美しさ」

(白)「申し分のない愛らしさ」「理想的な愛情」「冷ややかな美しさ」だそうです。  
(『花言葉事典』より)

2月2日撮影



ツバキの写真2月15日撮影



龍潭寺 諸田玲子「月を吐く」

諸田玲子の「月を吐く」は、1953(昭和28)年、大仏次郎の脚本、演出で上演された「築山殿始末」が好評を得て以来、阿井景子の「築山殿無残」などわずかな例外を除いて、悪妻・姦婦のレッテルを貼られてきた築山殿の生涯を、全く新しい視点で描いた意欲作である。

今川義元の姪瀬名姫には、互いに惹かれ合う幼なじみの高橋又五郎(広親)がいたが、今川館に人質になっていた竹千代(のちの家康)の求めで正室となり、夫婦相和し、一子(松平信康)をもうけた。

しかし、桶狭間で今川義元が織田信長に討たれ、夫元康(のちの家康)が岡崎城に帰還、信長と同盟を結んだことにより、瀬名の運命は急変する。

岡崎城の南東に新築された築山御殿に入った瀬名は、築山殿と呼ばれるようになった。城には側室と、家康の実母於大の方がいた。

於大は元康の父岡崎城主松平広忠の正室だったが、実家の異母兄が織田方に寝返ったため離縁され、その後阿古屋城(尾張・坂部城)主に再嫁した。

やがて信長の娘五徳姫が信康の正室として岡崎に入った。於大と徳姫(五徳姫改め)との二重の嫁と姑の葛藤に、今川の血筋が災いして、母と子は悲劇の坂を一気に転げ落ちていく。

瀬名は佐鳴湖畔の小藪で殺害され、広沢町の西来院に墓があるが、この作品では、作者は意外な結末を用意している。

「御前様。お客人にございます」

「わらわに……お客？」 (略)

「仏門に入る前のお名は、高橋広親さまと申されるそうにございます」

尼僧がつづけた。

「高橋広……」

さあーと霧が晴れた。無数の光の矢が合わさり、きらめく一本の矢になる。

「あれ、御前さま」

あっけにとられている尼僧を残して、瀬名は小走りに駆け出していた。

このハッピーエンドは、龍潭寺が舞台になっている。境内の木立の中にいた瀬名は、庫裏くらに向かって駆け出していく。庫裏は現在、県の指定文化財になっている。

静岡県沓谷にある龍雲寺は、今川氏親夫人寿桂尼の開基である。寿桂尼の墓のあった寺領の飛び地に、今川家ゆかりの高貴な老尼御前が住んでいたという言い伝えがあった。作者は空想をめぐらして、その後「広親と瀬名が吐月峰へ移り住み、さらに逝き遅れた瀬名が比久尼屋敷へ移って、月を愛でつつ今川の世を偲んだ」のではないかと考えたのである。

屋敷から東隣に当たるこんもりとした高台に移された寿桂尼の墓を望むと、竹林に覆われた山が見え、風が吹いて竹の葉がなびくと、山の頂から吐き出された月が姿を現す。2人が過ごした吐月峰からの眺めに驚くほど似ている。寿桂尼の墓の隣には、由来の知れぬ墓が寄り添うように並んでいる。